

「鎖国」の創出 志筑忠雄訳『鎖国論』—「桑木文庫」—

大島, 明秀
九州大学大学院比較社会文化学府

宮崎, 克則
九州大学総合研究博物館

<https://doi.org/10.15017/2885>

出版情報：図書館情報. 41 (1), pp.7-8, 2005-07-31. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：



九大が所蔵する記録史料の状態と活用 (8)

「鎖国」の創出 志筑忠雄『鎖国論』—「桑木文庫」—

大島 明秀
宮崎 克則

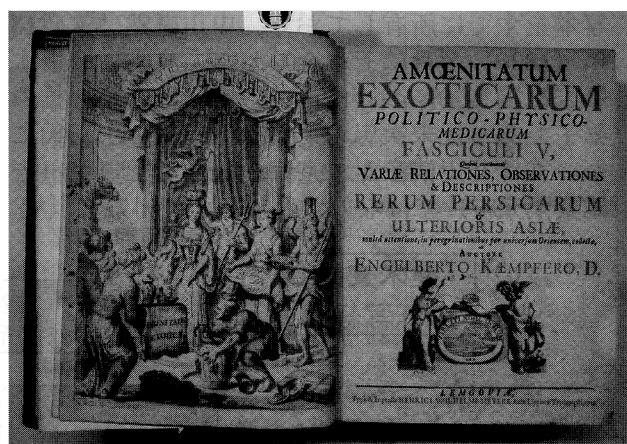
九州帝国大学の初代物理学教授 桑木彥雄（あやお）氏は、大正初期に長崎で志筑忠雄などオランダ通詞たちによる翻訳書を見て、江戸時代における技術書の収集を思い立った。天文学・測量学をはじめ和算書を主体とする「桑木文庫」には、志筑が翻訳した『鎖国論』も含まれている。これは享和元年（1801）に成立し、「鎖国」という言葉の始源となった書物であり、ケンペルの著作を訳したものである。

ケンペル(Engelbert Kaempfer, 1651-1716)

ケンペルは北ドイツのレムゴーで生まれた。その後、スウェーデン・ロシア・ペルシャ・インド・バタヴィア・シャムなどを経て日本に到着、元禄3～5年（1690-92）にかけて滞在した。彼は帰国後にライデン大学で学位を取得し、その学位論文を含め、1712年にラテン語で『Amenitates Exoticae』（『廻国奇観』）を出版した。この本の14章 “Regnum Japoniae optimā ratione, ab egressu civium, & exterarum gentium ingressu & communione, clausum.”（日本王国が最良の見識によって自国民の出国及び外国人の入国・交易を禁じていること）が、いわゆる「鎖国論」と呼ばれる論文である。

ケンペル死後、彼の原稿をもとに1727年にロンドンで英語版『The History of Japan』（『日本誌』）が刊行され、その附録として「鎖国論」も再録された。2年後にはフランス語版、オランダ語版も出され、日本に関する情

報源としてヨーロッパ各国で大いに受容された。オランダ語版が出島を通して日本に輸入され、それを見た志筑は付録の部分を日本語に訳し、タイトルを『鎖国論』とした。

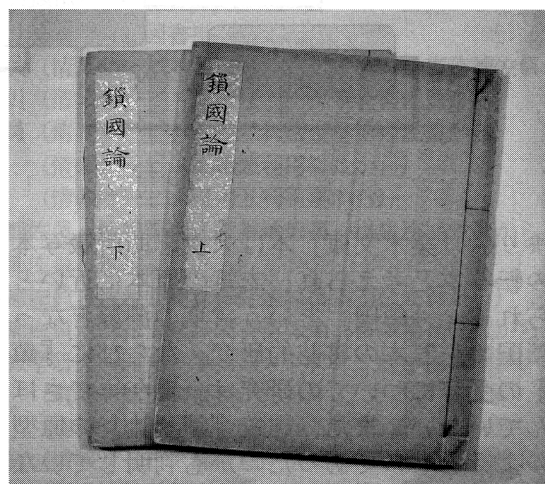


ケンペル『廻国奇観』(桑木文庫/洋書/0511)

志筑忠雄『鎖国論』

志筑の『鎖国論』は、将軍綱吉時代の日本讚美論であり、日本が外国と不必要な通交を避ける政策を採っていることを、原則的には禁止であるが現状の日本なら妥当であるとする、条件付の「鎖国」体制の是認論である。ただし志筑は、オランダ語版『日本誌』をそのままに翻訳したのではなく、彼自身の解釈や付記を付け加えている。それは、ケンペルの観察に対する補足説明や誤りの訂正が多くを占めるが、西洋への反感を示す志筑の意識も見てとれる。

志筑『鎖国論』は、嘉永3年（1850）に黒澤翁満『異人恐怖傳』と改題されて刊行されたが、すぐに幕府から出版差し止めを命ぜられ、現存する『鎖国論』は各地で写されて流布した。

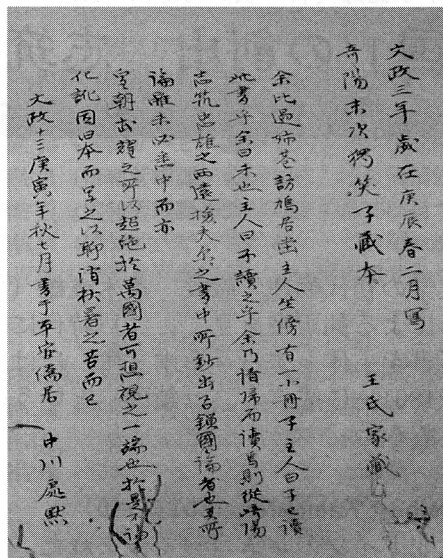


志筑忠雄『鎖国論』(桑木文庫/和書/1509)

「桑木文庫」の『鎖国論』

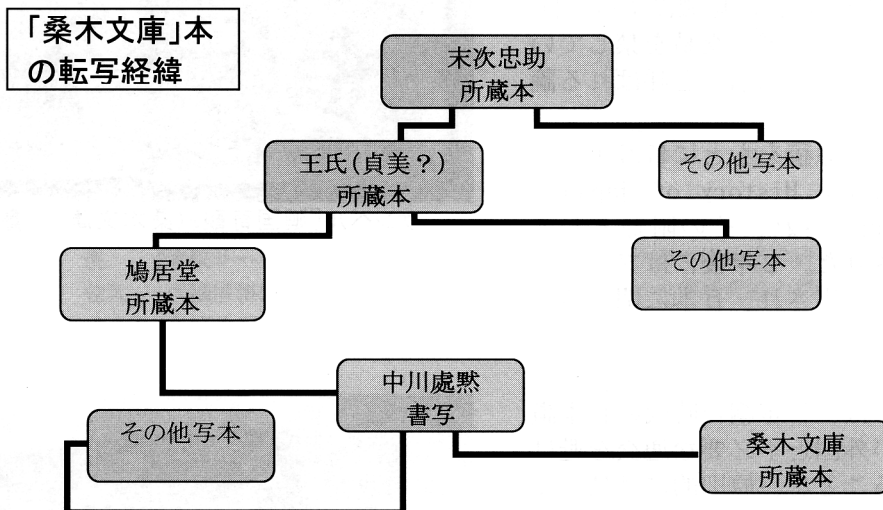
附属図書館にある『鎖国論』は、大本、上巻50丁、下巻35丁。蔵書印として「岡田氏図書記」があり、奥書に「文政三年歳在庚辰春三月寫／奇陽末次獨笑子藏本／王氏家藏」、「余比過姉菴訪鳩居堂主人坐傍有一冊子主人曰子已讀／此書乎余曰未也 主人曰子讀之乎余乃請婦而讀焉則從崎陽／志筑忠雄之西遠檢夫尔之書中所鈔出名鎖國論者也其所／論雖未必悉中而亦／皇朝武煌之所以超絶於萬國者可想視之一端也於是／化訛因日本而写之以聊消秋暑之苦而已／文政十三庚寅年秋七月書于平安僑居中川處默」とある。

奥書が貴重であり、この本がどのように写されたかを示している。それによると、文政3年(1820)3月に末次獨笑子所蔵本を王氏が写した。中川處默が鳩居堂主人を訪ねた時、どのような経緯かは不明であるが、鳩居堂主人は王氏写本をすでに所有しており、中川處默は文政13年(1830)7月にそれを写した。奥書に登場する末次獨笑子について、鈴木圭介は志筑忠雄の弟子であった末次忠助であると指摘し、王氏については井田清子が、京都の蘭学者王貞美(吉雄紫溟元吉)ではないかと推測している。「鳩



『鎖国論』の奥書

居堂」とは、現在も京都中京区寺町姉小路角にある、文房四宝・香を扱う「鳩居堂」のことで、文政13年頃に活躍した「鳩居堂主人」は熊谷直恭、あるいはその息子で勤王家でもあった熊谷直孝であろう。奥書者の中川處默については不明である。以上をまとめると、下記のような流れ図になる。



つまり、「桑木文庫」本は末次忠助所蔵写本からの転写本と考えられ、志筑の原本に近いと考えられる。「鎖国」という言葉の淵源となった『鎖国論』写本の書誌的研究、ならびに『鎖国論』の受容についての研究は、現在までさほど進んでいない。また、志筑『鎖国論』の原型がどのようなものであったのかも判明していない。「桑木文庫」本は、出自の良さ、情報量の豊富さから、これらの課題を解明する上で大きく貢献しうる写本と考えられる。

<参考文献・資料>
 鈴木圭介『写本の運命 ケンペル「鎖国論」の書誌学』(小川津根子、1998)
 井田清子「ケンペル『鎖国論』写本を読み継いだ人々」(『思想』800号、1991年)

(おおしま あきひで 比較社会文化学府博士課程)
 (みやざき かつのり 総合研究博物館助教授)